生涯学習センターだより

2026.11.27(金)　2026 年度第２号（11 月号、通巻 47 号）　発行:秋田県生涯学習センター

令和８年度 秋田県生涯学習・社会教育研究大会

令和８年１１月６日(金)、秋田県生涯学習センターを会場に、令和８年度秋田県生涯学習・社会教育研究大会が開催されました。生涯学習・社会教育主管課職員、公民館や市民センター等の社会教育関係施設職員、社会教育委員、生涯学習奨励員、家庭教育支援関係者、学校教育関係者、社会教育士、社会教育主事有資格者等６８名が参加しました。全体のテーマは、次のとおりです。

テーマ　　地域のつながりづくりを支える社会教育の展開
～共生社会の実現を目指し、学び続ける人材の育成～

午前は、岩手大学教育学部准教授 深作 拓郎 氏が『地域のつながりづくりと子どもの育ち』と題して講演されました。児童館と公民館の共通点、地域と学校の関係性など、現代の子どもを取り巻く現状と、それを支える社会教育の役割が語られました。「こども主体・こども参画」という視点から、「子どもの権利条約」や「こども基本法」にも触れ、大人の自己満足ではなく、子どもと一緒に考え合い、結果よりも過程（プロセス）を尊重する参画の重要性を強調するとともに、子どもたち自身による「自治」の育成の必要性についても語られました。また、子どもが守られていると実感できる場である「サンクチュアリ」と、少しルールから外れても社会が受け止めてくれる余白である「アジール」の両立、特に「アジール」に着目する必要性についても説明されました。社会教育においては、既成の正解に照らし合わせる「答え合わせ」ではなく、地域の大人と子どもたちが対等に思いを交わし、「応え合える関係」を育むことが大切であり、子どもを信じ「心は離さない」大人の姿勢が地域のつながりを生むのだと結びました。



午後は、当センターの実践研究発表が行われました。前半は、当センター社会教育主事 小嶋 聖が、『「一緒にできる」を生み出す学びの場づくり～モルックの実践から見えてきたこと～』について発表しました。



障害者の生涯学習を進めるためのプログラムの一つとしてスポーツに着目し、学びの場づくりに向けた取組としてモルックの実践を紹介しました。モルックの面白さや魅力について触れながら、障害の有無にかかわらず誰もが楽しむためには、使用する道具やコートの大きさなどを工夫してルールを人に合わせること、安心・安全な環境を整えることが重要であると、具体例を示しながら説明しました。ユニバーサルスポーツが学びの手段としての最適解の一つであること、学びの場づくりのために、「どうすればできるか」への発想の転換や「一緒に楽しむ仲間」へと認識を変えることの必要性など、横並びでつながる関係づくりを目指す上での大切な視点についてまとめました。結びに、当センターによる地域住民・関係機関等が主体となって企画・運営できる持続可能な体制づくりに向けた伴走支援についての提案で締めくくりました。

後半は、当センター社会教育主事 工藤 伸也が、『「当事者と共に考えること」から見えてくる社会教育施設の在り方～街歩き体験学習を通して～』について発表しました。



障害当事者との協働による「街歩き体験学習」の取組を通して、社会的障壁（バリア）への気づきと合理的配慮等について提案がなされました。車椅子利用者の視点に立った街歩きからはじまり、聴覚障害者の視点を取り入れたプログラムへと展開する中で、単なる擬似体験（不便さの体験）にとどまらず、当事者の声を聞き、当事者と共に学び合うプログラムへと進化させた経緯と成果を説明しました。社会教育関係者は『福祉の専門家ではなく学びの専門家であり、「どうすればできるか」といった視点に立ち、建設的対話（対等な話し合い）を通じて共に合理的配慮について一緒に考えるプロセスこそが大切である』と締めくくりました。

発表の後は、グループ協議を行いました。講演並びに実践発表で得た学びを踏まえ、『地域のつながりづくりのために、私たちができること』をテーマとして、ワークショップを実施しました。ラウンド１では、参加者のこれまでの実践や地域活動をワークシートに書き出し、グループ内で紹介し合いました。テーブルウォークを実施し、他のテーブルで話し合われたことを全体で見合いました。ラウンド２では、これから挑戦したいことをワークシートに書き出し、その中から自身が最も魅力や可能性を感じたアイデアを１つ選び、参加者全員の思いや考えを集約しました。ワークショップのまとめとして、秋田県生涯学習センター社会教育主事の 和泉 洋介が、地域社会づくりにおけるキーワードとして「アジール」と「サンクチュアリ」に触れ、「子どもの育ちだけではなく、大人にとっても自分の発言や存在が否定されずに受け入れられる安心感や心の余白があってこそ、自分の思いを表現し、他者と横並びでつながることができる」と話しました。最後に、近隣地域で手を取り合い、相互に尊重し合える学びの場を創出していくことへの期待が語られ、協議が締めくくられました。

令和８年度　第３回市町村・公民館等職員専門研修

令和８年９月３０日(水)、県内の生涯学習・社会教育関係職員や公民館、市民センター等の社会教育施設の職員に求められる資質や力量を高めることを目的として、今年度３回目の研修が開催されました。テーマは「障害者理解に向けて～障害者の生涯学習支援を考える～」です。

【講話】

午前始めは、秋田県聴力障害者協会 事務局長の 加藤 薫 氏を講師にお迎えし、講話をいただきました。加藤氏は自身の生い立ちや体験を振り返りながら、途中で聴力を失った中途失聴者としての葛藤や、手話との出会い、当事者団体での活動について語られました。また、日常の買い物や病院、交通機関利用時におけるコミュニケーションのバリア、車や自転車の接近に気づきにくい危険性など、聴覚障害者が直面する社会的障壁について具体的な事例を挙げて解説されました。さらに、健常者と聴覚障害者が相互に理解し合い、対等にコミュニケーションをとることの重要性や、手話・筆談・指差しシート等の多様な情報保障の重要性について示唆に富むお話をいただき、参加者にとって障害者理解を深める貴重な機会となりました。



【ワークショップ】



ヘッドフォンを装着しての街歩き

午前の後半から午後にかけては、秋田県生涯学習センター社会教育主事の 和泉 洋介 の進行によるワークショップを行いました。今年度は聴覚障害者の視点に立った街歩き体験として「アルクベ・イウベ・キクベ～in山王デフバージョン～」を実施しました。導入にあたり、和泉からは、「単なる疑似体験（『聞こえなくて不便・大変だった』という感情）で終わらせるのではなく、自らの業務や施設環境、街の仕組みにおける『課題（社会的障壁）』を発見し、どのように環境や対応を改善できるかという成人学習・主体的な学びの視点をもって臨んでほしい」という本ワークショップの目的と着眼点が伝えられました。参加者は２つのグループに分かれ、９つのミッションが書かれたカードや地図を確認し、ヘッドフォンや耳栓を装着して聴覚を制限した状態で、秋田県聴力障害者協会の加藤薫氏、工藤憲一氏（会長）、手話通訳者の方々にも協力いただきながら山王地区の街歩きに出かけました。街歩き中、参加者は以下のような体験・検証を行いました。

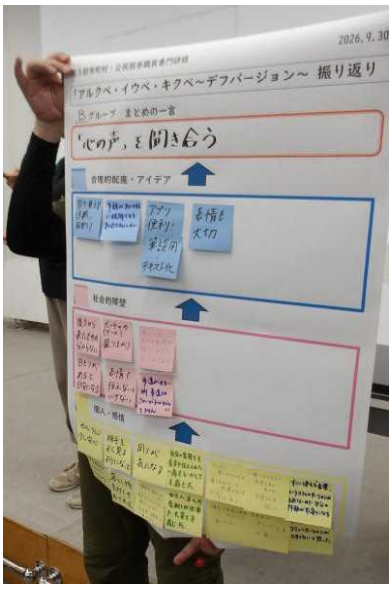




- 音による警告や車の接近音が聞こえない状態での歩行や横断歩道の横断
- 声を出さずに飲食店でランチをとる体験や、筆談・指差しでの注文・会計
- バス停での時刻表確認や手話での簡単なコミュニケーションの実践
- 指文字による暗号解読や聞こえない状態でのボッチャ体験

街歩き終了後は、各グループで体験を通して感じた「個人の感情」、「感じたバリア・社会的障壁」、「合理的配慮や改善アイデア」を付箋に書き出し、補足説明をしながら活発な意見交換を行いました。ワークショップの「まとめの一言」として、次のような振り返りの発表が行われました。

A班：「人の心・人の力」～お互いを思いやる意識と助け合いがバリアを無くす第一歩～
B班：「心の声を聞き合う」～当事者の声に耳を傾け、見えない不便さに気づく姿勢が大切～



体験のまとめ



グループ協議

最後に、加藤氏・工藤氏、及び進行の和泉から「音声だけに頼らない情報保障（文字・掲示・視覚化）の標準化や、当事者との協働による学びの場づくりが今後の社会教育・施設運営において不可欠である」とのメッセージが伝えられ、研修を結びました。